ギリシアの神々

岩波写真文庫　241

ギリシアの神々
241

岩波写真文庫　241　ギリシアの神々

編集　岩波書店編集部　岩波映画製作所
監修　澤柳大五郎

A　V

ミモン, アレス, エフィアルテス, アポロン, ヘラ, フォイトス

B　IV

A, B, C 神々と巨神との戦

オリュムポスの神々が世界を支配する前にも多くの神々があった。先ず大地(ガイア)から生れてその配偶となった**ウラノス**(天空)の時代、この父を去勢して支配を奪ったクロノス(Titanes の一人)の時代。その子のゼウスはこの巨神達(ティタネス)と戦い(ティタノマキア)、更に別の巨神達ギガンテス(英語 Giants)と戦わねばならなかった。このギガントマキアは死すべきものヘラクレスの助力を得て漸くゼウス一統の神々の勝利に帰した。

C　雷霆を投げるゼウス　H

はじめに

ギリシア人は多くの神々を信じていた。またその神々と人との間に生れた半神(ヘロス。英語 hero)を自らの祖先と考え、その輝かしい功業を語り伝えた。それらの神話や伝説はホメロスの二大叙事詩を始め悲劇や頌詩や地誌類に伝えられ、更にロマの詩人を経て現代に語り継がれた。しかしギリシア神話は聖書や古事記のような定まった形では書かれなかった。時代や地方によって同じ神が様々の姿を示し、別伝異説が生じる。そして美術家も詩人と同じく神話の語り手であり解釈者であった。この本にはそのギリシア美術に現れたギリシアの神々や半神の姿を集めた。これらは神話の挿絵として描かれたものではなく、それ自身直観的な、眼に訴える神話伝説なのである。従って文学に伝えられた伝承とは別の解釈もある。また美術に描かれていないために余儀なく割愛した重要な、或は美しい神話も少くない。ロマ固有の神話は省き、ルネサンス以降今日に至る夥しい近代の作例は一切採らなかった。言語学的、神話学的な細かい考証はもとより本書の任ではない。然るべきギリシア神話の本を参照して下さらば幸である。

ギリシア名		ロマ名	
アスクレピオス	Asklepios	アエスクラピウス	Aesculapius
アフロディテ	Aphrodite	ウェヌス	Venus
アテナ(パラス アテナ)	Athena (Pallas A.)	ミネルワ	Minerva
アポロン	Apollon (Phoibos A.)	アポロ, フォエブス	Apollo, Phoebus
アルテミス	Artemis	ディアナ	Diana
アレス	Ares	マルス	Mars
ウラノス	Uranos	ウラヌス	Uranus
エイレネ	Eirene	パクス	Pax
エオス	Eos	アウロラ	Aurola
エリニュエス	Erinyes	フリアエ	Furiae, Dirae
エロス	Eros	アモル, クピド	Amor, Cupid
ガイア	Gaia, Ge	テルス	Tellus, Terra
カリス(カリテス)	Charis, Charites	グラティアエ	Gratiae
キュベレ	Kybele	マグナ マテル イダエア	Magna Mater Idaea
クロノス	Kronos	サトゥルヌス	Saturnus
サテュロス	Satyros, Satyroi	ファウヌス	Faunus, Fauni
ゼウス	Zeus	ユピテル	Iup(p)iter
セレネ	Selene	ルナ	Luna
ディオニュソス	Dionysos	バックス, リベル	Bacchus, Liber
デメテル	Demeter	ケレス	Ceres
テュケ	Tyche	フォルトゥナ	Fortuna
ニケ	Nike	ウィクトリア	Victoria
ハデス	Hades	プルト	Pluto
ヘスティア	Hestia	ウェスタ	Vesta
ヘファイストス	Hephaistos	ウルカヌス	Vulcanus
ヘベ	Hebe	ユウェンタス	Iuventas
ヘラ	Hera	ユノ	Iuno
ヘリオス	Helios	ソル	Sol
ペルセフォネ	Persephone	プロセルピナ	Proserpina
ヘルメス	Hermes	メルクリウス	Mercurius
ポセイドン	Poseidon	ネプトゥヌス	Neptunus
モイライ	Moirai	パルカエ	Parcae
レト	Leto	ラトナ	Latona
アイアス	Aias	アヤクス	Aiax
オデュセウス	Odysseus	ウリクセス	Ulixes, Ulysses
ポリュデウケス	Polydeukes	ポルクス	Pollux

＊ネイムの後のロマ数字はその作の作られた世紀を示す(模作の場合は原作の年代による)。紀元後の世紀にはA.D.を附し、以下次の略号を用いた。H＝ヘレニズム時代。R＝ロマ時代。It＝古代イタリア製品。M＝近世作品(古代の粉本に拠る。)

＊ネイムの下(時に上、或は横)の細字は図中の人物の名を左から順に列記したものである。

＊本文下欄の数字は主なる参照頁を示す。

＊本書ではロマの神話は扱わないが、現代の西欧諸国ではギリシアの神名をそのロマ名で(勿論それぞれの発音で)呼ぶ場合が多いので、厳密には両者は必ずしもその神格属性の上で同一ではないが、参考の便宜の為に右にその対照表を掲げた。

＊索引は図上に姿を現す神人のみに限った。

定価100円 1957年10月25日 第1刷発行 1960年3月20日 第2刷発行 © 発行者 岩波雄二郎 印刷者 米屋勇 印刷所 東京都港区芝浦2ノ1 半七写真印刷工業株式会社 製本所 永井製本所 発行所 東京都千代田区神田一ツ橋2ノ3 株式会社岩波書店

エロス

G 豹を御するエロス R

E アフロディテとエロス Ⅳ

H 弓を張るエロス Ⅳ

F エロスとプスュケの結婚 R

I 柘榴花中のエロス It.

エロス(愛)は本来ガイアと共に最初にカオス(空漠、渾沌)から生れた最も根源的な力であり、神々にも人間にも強い作用力を持つ最も美しい神であった。後にアフロディテとアレス(或はヘルメス)との子とされその力も恋愛に限られて来る。プラトンの饗宴では道(ポロス)と貧(ペニア)との子で美に於ける生産への渇望と説かれる。エロスとプスュケ(こころ)の恋は更に後の物語である。翼のある美しい少年として表されるが、ヘレニスム以後は幼児形が多い。名高い弓矢も前四世紀に初めて現れる。ルネサンス以後のプットーもエロス(アモル、クピド)の変形。

ガイア・クロノス・レア

B レア(《大アルテミス》) Ⅶ

A 我子の死を痛むガイア Ⅴ

ガイア, ポセイドン, ポリュボテス

ケクロプス, ガイア, エリクトニオス, アテナ, ヘファイストス, ヘルセ

C アテナにエリクトニオスを渡すガイア Ⅴ

ガイア(又はゲー)即ち大地は万物の母である。天空(ウラノス)、蒼海(ポントス)、山岳を生み、ウラノスと婚って六男六女のティタネス、三柱ずつの隻眼巨神(キュクロペス)、百腕巨神(ヘカトンケイレス)を生み、更に天空(ウラノス)の血を受けてギガンテス、エリニュエス(復讐女神)等を生んだ。**クロノス**は天空(ウラノス)の末子、我子の奈落(タルタロス)に押籠められたのを憤った母から与えられた利鎌で父の陽具を切落して(海に落ちたその泡からアフロディテが生れた)支配権を奪った。**レア**(又はレイア)はクロノスの姉妹でその妻となりオリュムポスの六主神の母となった。大なる母、神々の母と呼ばれクレタの百獣の主女(ポトニア・テロン)、フリュギアのキュベレと結びつく。

D クロノス M

C　雷霆を投げるゼウス　V

A　ゼウスの幼時　M

B　ゼウスと鷲　VI

D
オリュムポスの神々　VI

ヘベ，ヘルメス，アテナ，ゼウス，ガニュメデス，ヘスティア，アフロディテ，アレス

ゼウスは神々と人間との父と呼ばれる。クロノスは我子に主権を奪われるのを恐れて生れた子を皆呑んでしまう。レアは六人目のゼウスをクレタ島のディクテ洞で生み夫には襁褓に包んだ石を与える。ゼウスは山羊アマルテイアの乳で養われクレス達は武具を鳴らして泣声の父の耳に入るのを防ぐ(**A**)。成長の後太洋(オケアノス)の娘智(メティス)の助を借りて父の呑んだ同胞を吐き出させ、父の同胞(ティタネス)や巨神達(ギガンテス)との長い困難な戦に勝ち、ゼウスは天地を、兄のポセイドンとハデスはそれぞれ海洋と冥府を支配する。

E　玉座のゼウス　V

G　ヘラ　V

F　ガニュメデスを拉するゼウス　V

J　テミス　III

I　ヘラクレスを抱くヘラ　III

H　オリュムポスを降るヘラ　III

K　ヘラ　IV

ゼウスの持物は笏或は雷霆、聖獣は鷲。山羊皮楯(アイギス)は娘アテナの不可欠の標識となった。寵児はガニュメデス、このトロイア王子の美を愛でて主神自ら(鷲を使うのは四世紀以来)掠し来ってオリュムポスの酌侍とした。ゼウスの権能は無限、その副名も夥しいが常に威厳ある有髯の姿をとる。ゼウスの妃は神、人ともに数多いが、その中で最も若い同胞の**ヘラ**が正妃と認められアレス、ヘファイストス、ヘベ(及びエイレイテュイア)の母となる。嫉妬深く残酷な行為もあるが、純潔な結婚の守護神として女性の尊崇を受ける。**テミス**(法)は母ガイアからデルフォイの神託権を受け夫ゼウスにも屢々勧告を与える。

A アテナの誕生 V

ニケ，ポセイドン，ヘファイストス，ゼウス，アテナ，エイレイテュイア，アルテミス

C アテナ　パルテノス V

B アテナ　エルガナ V

D コリントス兜のアテナ V

アテナ（パラスは娘の意か）はヘファイストスの斧に割られたゼウスの頭から完全武装して飛び立った（エイレイテュイアは誕生神）。メドゥサの面をつけた山羊皮楯（アイギス）、鳥毛の兜、槍を手にもつ女神は賢明な戦の導き手として阿修羅の軍神アレスと好対照。家や都市の存続を保証するパラディオン（パラス小像）は古くから家また都市に祀られた。女神はまた紡織はじめ様々の手工芸の守護者（エルガナ）でもある。笛を発明したが吹奏は顔を歪めると女神の捨てた笛をマルスュアスが拾う（**G**）。

47　12　60

G アテナとマルスュアス V

E パラディオン V

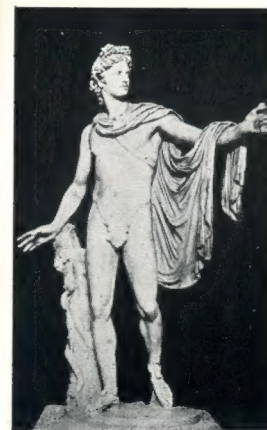
F パラディオン VI（パナテナイア祭賞瓶画）

H 沈思するアテナ V

都市の守護神（ポリアス）、特に女神の名に負うアテナイの守神として同市のアクロポリスはこの処女神（パルテノス）に捧げられる。女神は海神ポセイドンとアッティカの土地を争ったが、海神の贈った塩泉より女神の贈ったオリーヴの方を市民は喜んだのでこの土地は女神のものとなった。今パルテノン（**C**はフェイディアス作の本尊を写したアスパシオス作の彫瑩（ゲムマ））の北エレクテイオン（エレクテウスとアテナを共祀）の内外にその泉とオリーヴの聖蹟がある。四年毎の全アテナイ祭（パンアテナイア）には女神に新衣が献ぜられ、体育や音楽の優勝者には女神を描いたアムフォラ（**F**）が贈られる。アテナの聖獣は、梟、時に蛇（エリクトニオスに関係）。ヘラクレス、オデュセウス、ペルセウス、アキレウス等の半神は女神の寵を受けその加護により難業を成就する。

20　64　2,40

A レト，アポロン，アルテミス V

B 浄祓のアポロン Ⅳ

C ティテュオスを討つアポロン V

D アポロンとマルスュアス Ⅳ

E アポロンと牡鹿 Ⅵ

アポロンと**アルテミス**はゼウスと**レト**との双生児。アポロンはギリシア神話中で最も高貴な最も美しい青年神である。フォイボスとも呼ばれ、後に太陽神ヘリオスと同一視されるが、本来救済浄祓の神、音楽、牧畜の神である(月桂樹、竪琴、弓矢を持つ)。しかしアポロンの最大の職能は予言である。生後間もなくデルフォイの竜ピュトンを退治し神託権を獲た。そのデルフォイでは予言の座としてオムファロス(臍、世界の中心)と三脚(トリプス)が礼拝される。学芸神(ムサゲトス)としてムサイを統べ、竪琴(キタラ)をもつ姿キタロドスとして表される。

24 50C 28D

I アポロンを迎えるアルテミス Ⅶ

F アルテミスと牝鹿 Ⅳ

G オムファロスに坐すアポロン Ⅳ

H マルスュアスの懲罰 M

J アルテミスとアクタイオン V

K 炬火もつアルテミス R

アルテミスはエフェソスの神像が多数の乳房をもつように もと小アジアの母性神としてレア＝キュベレとも結びつくがギリシアでは狩女姿の処女神である。古い百獣の主女(ポトニア・テロン)(I及び2頁B)とも結びつき常に牝鹿と水精(ニュムファイ)を伴とする。純潔の守護神として結婚する者は必ず女神に犠牲を捧げる。延いて出産の神、幼児の守神とも崇められる。お伴の水精の中には元クレタからアイギナに逃れてアファイアとして祀られたブリトマルティスやゼウスに犯されて熊に変えられたカリストがある。オリオンは処女オピスを犯して女神に射られ、アクタイオンは女神の水浴を垣間見て鹿に変えられ己が猟犬に喰殺された。

9 27 29

A アフロディテの誕生 V

C アフロディテとパン Ⅳ

B 鵞鳥に乗るアフロディテ V

アフロディテはウラノスの陽具の落ちた海の泡から生れてキュプロス島に流れ寄ったとも、またゼウスとディオネの娘ともいわれる。愛と美と結婚の神であり、時として(スパルタなどで)戦神でもある。火神ヘファイストスの妃であるが、寧ろ軍神アレスとの愛を謳われ、この神と共に祀られる例が多い。両神の間にエロス、ハルモニア、アンテロス等が生れた。またトロイアのアンキセスを愛してアイネイアスの母となった。

2 3 37 61

D アフロディテ パンデモス R

G アフロディテとエロス Ⅵ

E アフロディテとアドニス R

F 貝殻のアフロディテ H

H ヘルマフロディトス R

ウラニア(天上の)、パンデモス(全人民の)という称呼を清浄な愛と肉欲的な愛とする解釈はプラトン以降であって古くは必ずしもそうではない。最も古くキュプロス島で祀られ(キュプリスと呼ばれる)、更にキュテラ島(キュテレイアと呼ばれる)を経て本土に入って来たらしい。パリスの審判で勝利を得た女神はトロイア戦争では勿論パリスの方(トロイア方)に味方する。寵児**アドニス**の出生に就いては諸説がある。その絶世の美貌によりアフロディテ、ペルセフォネ両女神に熱愛せられたが、若くして猪に傷けられて死んだ。その血から薔薇或はアネモネは生じたという。**ヘルマフロディトス**はヘルメスとアフロディテの子といわれ半陰陽であるが美術に現れるのは四世紀以後である。水精サルマキスとの恋物語は更に後の時代の創作である。

17 55

アレス

C 憩えるアレス Ⅳ

A アレスとアフロディテ Ⅳ

B アレスとアフロディテの結婚 I. A.D.

アレスはゼウスとヘラの子。息子のフォボス(怖れ)やデイモス(慄き)、また不和の女神エリスを引連れて血腥い修羅場を駆け廻る荒々しい軍神である。アマゾネスやキュクノス、リュカオン兄弟、カドモスに殺された竜等もアレスの子である。ケクロプスの娘アグラウロスが生んだ軍神の娘アルキッペをポセイドンの子ハリロティオスが犯そうとするのを殺して海神に訴えられ、十二神の裁判を受け無罪になった場処がアテナイのアレイオス パゴス(アレオパゴス)(アレスの丘。昔ここに最高法廷があった)である。ロマのマルス(ウルトルは復讐者)はアウグストゥス時代に篤く崇敬された。

55 49 37 40

D マルス ウルトル R

ヘファイストス

G ヘファイストスの鍛冶場 Ⅵ

E ヘファイストスとテティス Ⅴ

H ヘファイストスのオリュムポス帰還 Ⅴ

セイレノス, サテュロス, ディオニュソス, ヘファイストス

F ヘファイストス Ⅳ

ヘファイストスはアレスの同胞。生れながらに跛だったのを母ヘラは恥じて海へ投棄てた。ネレイデスのテティスとエウリュノメに育てられ、後オリュムポスに還って神々の宮殿を作った。もと小アジアの火神であるが、鍛冶の神、巧芸の神としてアッティカはじめ本土の諸方で崇敬された。その工房はオリュムポスともレムノス島のモスキュロス山、シケリアのアイトナ山の底ともいわれる。その作品はゼウスの雷霆、アテナの山羊皮楯(アイギス)、エロスの弓、ヘリオスの馬車など神々の持物のみならず、アキレウスの武具、ハルモニアの首飾など、ギリシア神話に出て来る美術品はすべてこの神の作品である。妃アフロディテとアレスの密会を精巧な網で捕える話はホメロスのオデュセイアに詳しい。彼の子といわれるエリクトニオスについては後述(40頁)。

13 21 37*f.*

A 牛盗人ヘルメス Ⅵ

C ヘルメス クリオフォロス Ⅵ

B アルゴスからイオを奪うヘルメス Ⅴ

ヘルメスはアトラスの娘の一人(プレイアデス)マイアとゼウスの子。アルカディアのキュレネの洞で「暁に生れ、昼には(亀の甲で自ら作った)竪琴を奏し、夕にはアポロンの畜牛(五十頭)を盗んだ」。占で犯人を知ったアポロンに責められてマイアは襁褓に包まれた幼児を示す(A)。ヘルメスは兄に竪琴を与えて代りに畜牛は貰う。また自ら発明した葦笛と引換えに黄金の呪杖を貰い、初歩の予言の術を教えられる。

D ヘルメを飾るニケ Ⅴ

F 霊魂を導くヘルメス Ⅴ

E ディオニュソスを抱くヘルメス Ⅳ

G ヘルメスとパン Ⅴ

ヘルメスは交通の安全、また戸口を守る神(プロピュライオス)として古くはファロスのみを刻出した角柱上に首を載せた所謂ヘルメ(D)に作られた。青年の神として各都市の体育場(ギュムナシオン)には必ずヘルメがあった。アポロンと同じく牧者の神(ノミオス)として山羊を荷う(クリオフォロス)像も多い。商業や旅行(更に盗人)の神としてそれに携る人々から尊崇される。しかしヘルメスの最も重要な職能は神々、特にゼウスの使者である。鍔広帽(ペタソス)、短外套(クラミュス)、有翅鞋(サンダル)に指揮杖(ケリュケイオン)を手にした姿は軽捷な旅人の服装である。ゼウスの依頼で幼弟ディオニュソスを遠いニュサの水精の許に連れて行ったり(E)、百の眼を持つ普く見る者(パノプテス)アルゴスを殺して白牛に変えられたゼウスの恋人イオを連れ出したりする。更に霊を導く者(プシュコポムポス)として冥府へ死者を導く。一説にオデュセウスの妻ペネロペによってパンの父となったという。

C エレウシスの神々 Ⅳ

A デメテルとペルセフォネ Ⅴ

D 悲しみのデメテル Ⅳ

B ペルセフォネの帰還 Ⅴ

デメテル(地の母の意か)はクロノスとレアの娘、ゼウスやヘラの同胞である。万物成育、五穀豊饒の母神である。一人娘コレ＝ペルセフォネをハデスに奪われ、炬火を手にして九日間諸方を経廻った。為に万物は枯れ飢饉が生じた。途上老媼に身を窶した女神はエレウシス王の許で厚く迎えられ王子デモフォンを不死にすべく竈の火にかざした所を母后に見咎められて、女神は本身を顕わして祭祀を命じた(エレウシスの秘儀はここに始まる)。また王子トリプトレモスに穀穂を与え、全土に耕作を伝えさせるべく竜駕に乗せて旅立たせた。

E デメテル Ⅴ

F エレウシス二神とトリプトレモス Ⅴ

G トリプトレモスの門出 Ⅴ

H アフロディテとペルセフォネの競争 Ⅴ

ところで掠奪者のハデスなることを知って夫ゼウスに娘の返還を訴え、その裁定によりペルセフォネは一年の1/3はハデスの妃として冥府に留り、残りを母の許で過すことになった(10頁**A**もペルセフォネの地上帰還と見る説あり)。この母娘両神にイアッコスを加えた三柱がエレウシスの秘儀の三祭神を為す。

ペルセフォネ(単にコレ＝少女とも呼ばれる)はデメテルの子として土地豊饒の神であると共にハデスの妃として死者の神でもある。アフロディテと美少年アドニスを争い、ゼウスの裁定によって一年の1/3を美神の許で、1/3を冥府で、残りの1/3はアドニスの意の儘にと定められたが、美少年はその期間もアフロディテの側についたという(**H**)。イアシオンはデメテルと交り父ゼウスの雷霆に死んだがプルトス(富)はその子だという。

A ハデス, ポセイドン, ゼウスとペガソイ Ⅵ

B 玉座のハデス R

D 冥府のハデスとペルセフォネ V

C 渡守カロン V

E 玉座のハデス M

ハデス(プルトン、アイドネウスとも)はゼウス、ポセイドンの兄弟と世界を三分して冥府の王となった。暗く峻厳ではあるが人間を悪に導く者でもなければ死者の判官(これはミノス、ラダマンテュス兄弟、アイアコスなどの役)ですらない。冥界といってもハデスの国(ハデスの家とも呼ばれる)は択ばれた死者の行くエリュシオン(浄福の島)に行けない普通の死者の霊が影の如く暮す暗い地下の世界である。死者の霊はヘルメスに導かれタイナロンやヘラクレイアにある入口から入り、アケロン、ステュクス、コキュトス等の流れを渡守カロン

4 36 15

F デメテル, ヘルメス, ペルセフォネ, ディオニュソス Ⅵ

G ペルセフォネの掠奪 M

I 遁れようとするコレ V

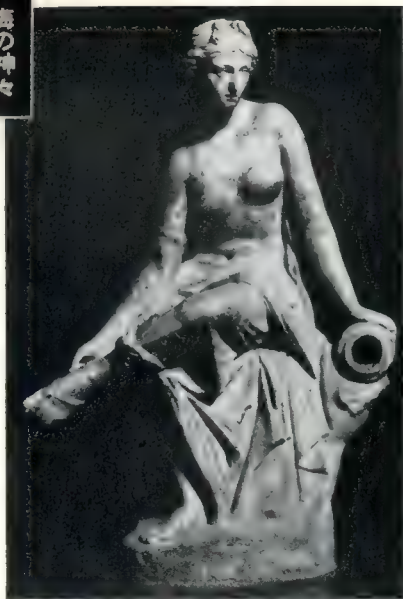
H ケルベロスを引くヘラクレス V

J エウブレウス Ⅳ

の舟で渡り(この為に死者の口に一文銭(オボロス)を入れて葬る)冥府に達する。向岸には三頭の怪犬ケルベロスがいて一度渡ったものは決して再び出られない。ヘラクレスは十二難業の最後にケルベロスを連れ出したし、テセウスやアルケスティスを冥府から連れ戻したこともある。

ハデスはペルセフォネの美しさに魅せられ、ゼウスの許は得たが母デメテルの許は得られそうもないので、彼女の花を摘んでいる所を突如地を裂いて強奪する。**エウブレウス**(善謀者)も冥界の神。又ハデスの異名ともいわれる。

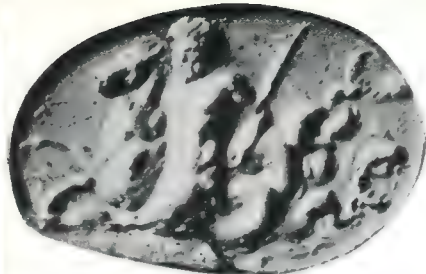
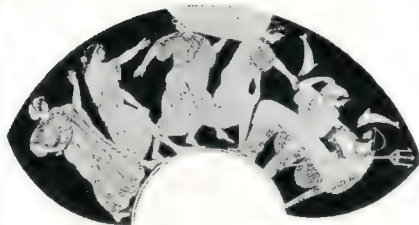
49*f.* 50

I ネレイス II

F オケアノス R

G ネレウス，ドリス夫妻と娘達 V

J アキレウスに武具を渡すテティス等 VI

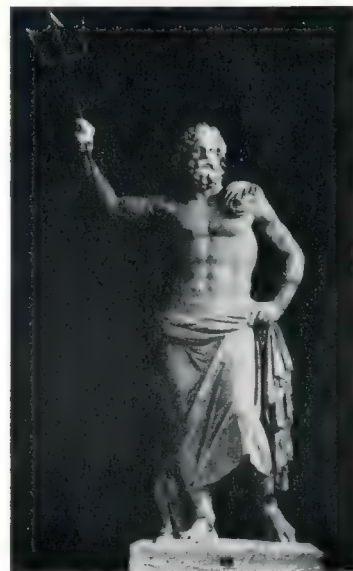
H トリトン VI

K ポセイドンとアミュモネ R

オケアノスはティタネスの一人。姉妹のテテュスを妻としメティスはじめ三千のオケアニデスの父となる。古くは世界を廻る流れであったがやがて海と一つになった。

ネレウスは海洋(ポントス)と大地(ガイア)との子。ポセイドンの如く怖しからず優しい老翁で、太洋(オケアノス)の娘ドリスを妻として五十人のネレイデスの父となる。その娘達(ネレイデス)は、ポセイドンの妃アムフィトリテ(トリトンとロデはその子)、アキレウスの母テティス、ポリュフェモスに恋されたガラテアを除いて、概ね無名の海の乙女として海神に扈従し、航海者を舞踊で慰め、危難に際して優しく救う。

58　4　21

A 神々の集り V

エウモルポス，ゼウス，ディオニュソス，アムフィトリテ，ポセイドン

D ポセイドン II

B 海馬を御するポセイドン R

C ポセイドンとアテナの土地争い M

ポセイドンは同胞ゼウス、ハデスとの協定により海を支配する。三叉の戟の一撃はゼウスの雷霆の如く怖しい暴風怒涛を起す。神は又震地者(エノシクトン)として地震を起す(その名は大地の夫の意で本来は地の神だったらしい)。アテナとアッティカを争って敗れたが、ポセイドン＝エレクテウスとして此地で祀られる。アルゴスをヘラと争って敗れたが同所でプロクリュスティオス(洪水を起す者)として神殿を得た。ゼウスに次いで情事多く(ダナオスの娘アミュモネは泉の傍で海神と結ばれる)、ペガソス等の神獣、アンタイオスやポリュフェモス等魁偉な子を作った。

62　50　18　7

E ポセイドン R

A ディオニュソスの誕生 V

D ディオニュソス VI

B ディオニュソスとセイレノイ V

C ザグレウス（猟人ディオニュソス） V

E ディオニュソスとイアッコス V

F ディオニュソス VI

ディオニュソスはカドモスの娘セメレの生んだゼウスの子（随って本来は半神）である。嫉妬深いヘラに唆かされてセメレはゼウスに本当の姿を顕わすことを乞い雷火に焼かれて死ぬ。ゼウスは胎児を取上げて自分の腿に縫い込み、月満ちて生れた児をヘルメスに託してニュサの水精に預ける。ディオニュソスは葡萄の神、陶酔の神として様々の抵抗に逢いながら本土に帰依者を獲得する。扈従はサテュロイやセイレノイ、人間では生蔦の冠、狐の裘、テュルソスを手

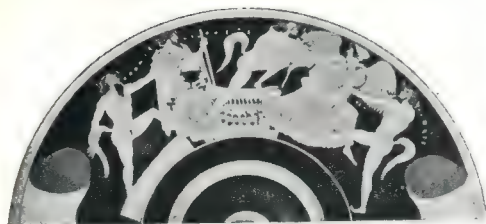
I 狂乱のマイナス R

G ディオニュソスの航海 VI

J 豹に授乳するマイナス R

H ディオニュソス祭のマイナデス V

K ディオニュソスの車を引くプスュケ R

に狂い踊る狂信の女達（マイナデス）。マイナデスは羊や犢、人間の子さえ引裂き啖うが動物とは親しく乳かうこともある（J）。テュレニアの海賊がディオニュソスを売ろうとした時、縛は自ら解け檣に生蔦と葡萄が絡み生じ舟は止った。海賊等は海に飛込んで海豚（デルフィス）となった。ゼウスが娘ペルセフォネに生ませたという狩猟神ザグレウスはデメテル或はペルセフォネの子といわれるイアクコスと同一視され更に両神ともディオニュソスと同一視される。

G セイレノイに襲われるエオス V

H オレイテュイアを拐うボレアス V

E ニケ II

F トロパイオンを飾るニケ IV

I イリス V

J ニケ R

イリス(虹)は海洋《ポントス》の子のタウマスとエレクトラの子で、ハルピュイアイの姉妹である。神々、特にゼウスとヘラの使女としてオリュムポスから地上へ、更に海の底まで駆廻る。時に雨を齎す西風《ゼフュロス》の妻となる。北風《ボレアス》はエレクテウスの娘オレイテュイアを拐ってゼトス、カライス兄弟の父となった。

ニケ(勝利)は一説にパラスとステュクスから(支配《クラトス》、暴力《ビア》、妬心《ゼロス》と共に)生れたという。特別の神話もなく単独に祀られることはないが、勝利の象徴として単独に、或はゼウスまたアテナ像の手に載せられた形で作られる。概ね有翼、天馳ける姿が好まれる。

A 天空の神々 V

A セレネ, ケファロス, エオス, エンデュミオン, 星たち, ヘリオス

B セレネ V

D エオスとティトノス V

C エオス R

ヘリオス(日)、セレネ(月)、エオス(曙)は共にウラノスの孫、ヒュペリオンとテイアの子。**ヘリオス**は万事を照覧する神として諸〻の誓に懸けられる。火の如き四頭の駿馬に馬車を引かせて日毎に東より昇り西の太洋《オケアノス》に沈む。

セレネは呪術師の守神。屢〻アルテミスと同視されるが特別の祭祀はない。二頭立の馬車を御し夜毎に空を廻る。エンデュミオンを愛しラトモス山に眠る少年に接吻しに行き、ゼウスに乞うて彼に永遠の若さと眠りを与えた。

エオスも泊夫藍《サフラン》色の衣、薔薇なす指して二頭立の車を駆る。アストライオス(星空)との間に星と風とを生んだが、オリオン、ケファロスに恋した。特にラオメドンの子ティトノスの美を愛しゼウスに乞うて不死を得たが青春を乞い忘れたのでティトノスは老い萎びた。メムノンは両人の子。

アスクレピオスとヒュギエイア

A　アスクレピオス　Ⅳ

C　ヒュギエイア　Ⅳ

B　アスクレピオスとオムファロス　Ⅴ

D　アスクレピオスとヒュギエイア　Ⅳ

アスクレピオスはアポロンとコロニスの子。コロニスは同時に青年イスキュスを愛して神を欺いた瀆神に死す。アポロンは嬰児をケイロンに託す。アスクレピオスは従って半神であるが父と養育者から医術を学んで医神としてエピダウロスその他の地に祀られた。病者を癒すに止らず死者をも蘇らせた為に秩序を乱す者としてゼウスの雷霆に打たれた。アポロンはその雷霆を作ったキュクロプスを殺した罰にアドメトスの許に一年仕えることになる。医神には数人の子があるがヒュギエイア(健康)のみ父と共によく描かれる。医神の標識は蛇と杖。

E　犠牲の蛇　M

テュケ・キュベレ

F　テュケ　R

H　キュベレ　Ⅲ

G　フォルトゥナ　R

I　キュベレとアッティス　Ⅲ

J　テュケと鷲　H

テュケ(運命)はオケアニデスの一人ともゼウスの娘ともいわれる。特別の神話は無いが四世紀にはテバイ、メガラ、メガロポリスに神殿があった。「市の運命(テュケ)」として祀られたのである。豊饒角(コルヌコピア)または櫂を持つ。ロマではフォルトゥナ。

キュベレはフリュギアの大母神としてレアと結びつく。その祭には獅子や豹の引く馬車の上の玉座に坐しコリュバンテスを伴としてぞめき行く。女神は美青年アッティス(本来女神の分身)を熱愛し、青年の他の水精に恋したのを怒り彼を発狂自殺させたが、のち非を悔いてゼウスに蘇生を乞うたが及ばず、ただ屍の不変だけを得たという。

ホライ・カリテス・ムサイ

D アポロンとムサイ（メレロサとテルプシコラ） V

A エイレネとプルトス Ⅳ

B ムサ（ポリュヒュムニア） Ⅲ

C ムサ（タレイア） Ⅲ

E カリテス H

ホライ（時）はゼウスと法の間に生れた季節の女神。平和、秩序、正義、（或は開花、成育、結実）の三柱一組をなし、人間生活の秩序を守る。

カリテス（優雅）は、ゼウスとエウリュノメの娘で、光輝、歓喜、豊熟（或は増殖、指導）の三柱一組を為し、神々や人間に優雅と美と喜びを齎す。ホライもカリテスもアフロディテの伴侶として現れる。

ムサイはゼウスと記憶の娘達。その名（musa は考えるもの。music, museum の語源）の如く音楽、引いては学芸一般（詩、劇、歌、踊、歴史、天文等）の守神。いつか九柱となり名と職能とが定まったが、アポロンに導かれて奏楽し舞踏する。

F ホラ R

ニュムファイ

I アポロンとダフネ I. A.D

G 蛇体のニュムファイ Ⅵ

J ナルキッソス I. A.D.

H 水精アレトゥサ V

ニュムファイはゼウスの娘達。水精と訳されるが、山の精、泉の精、木の精、川の精などあり、ネレイデスやオケアニデスもニュムファイである。不死でないが常に若く美しく（nympha は年頃の乙女の意）神や人と恋をする。水精に魅せられて本性を喪う者もあれば水精の恋を却けてアフロディテに罰せられたナルキッソス（水鏡の己に恋して遂に水仙となる）やダフニスのような若者もある。アポロンに恋い追われて月桂樹と化したダフネ、狩人アルフェイオス（本土の河）の手を逃れてシケリア島で泉と化したアレトゥサのようなニュムファもある。

K ナルキッソスとアルテミス像 R

A モイライ V

B ヒュプノスとタナトス VI
イリス，ヒュプノス，メムノン，タナトス，エオス

D ヘスペリデスとアトラス IV

C ヒュプノス IV

ニュクス(夜)の子は苦、欲、老等の抽象名詞で表されるものが多いがここには幾らか形あるものを掲げる。**モイライ**(一説ゼウスとテミスの子)は運命の女神、紡ぐ者(クロト)、頒つ者(ラケシス)、避け難い者(アトロポス)の三柱(**A**の解釈には諸説あり)。**ネメシス**も過当の幸不幸を匡す運命神。瀆神を罰する点では、復讐の女神エリニュエス(不罷者(アレクト)、嫉妬者(メガイラ)、報復者(ティシフォネ))に通ずる。**ヘスペリデス**(晩の娘達。一説アトラスの子)は地の西の果でガイアがゼウスとヘラの結婚祝に贈った金の林檎を竜のラドンと共に守っている。この林檎を持帰るのもヘラクレスの難業の一。死(タナトス)と眠(ヒュプノス)は有翼の少年の姿で表される。

E ネメシス R

2 49 30

I スフィンクス VI

F メドゥサとクリュサオル VII

J キマイラ VI

G ゼウスと闘うテュフォン VI

K スキュラ III

H エキドナ VI

フォルキュス、ケト兄妹からグライアイ(一眼一歯を共有する三老婆)、ゴルゴネス、**スキュラ**(カリュブディスと共に海峡の魔物)等が生れた。ゴルゴネス三姉妹中**メドゥサ**だけ不死でなかった。ポセイドンと交りペルセウスに殺された時有翼馬(ペガソス)と黄金剣(クリュサオル)を生んだ。ギガンテスが敗れた時、大地(ガイア)は**テュフォン**(颱風の語源)を生み神々と戦わせた。苦戦の末ゼウスはアイトナ山で押えた。テュフォンと黄金剣(クリュサオル)の娘**エキドナ**とからケルベロス、オルトス、**キマイラ**、**スフィンクス**等の怪物が生れた。

L メドゥサ VI

31 47 19 44 38

パン・サテュロス・セイレノス

A パン Ⅳ

C サテュロスとマイナス Ⅵ

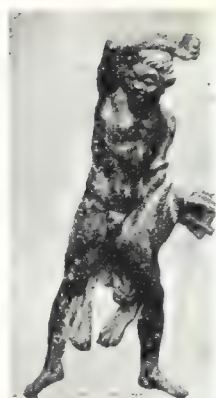
D 葦笛を吹くパン M

E 山羊と争うパン M

F ニュムファイとサテュロイ R

B 踊るセイレノス V

G セイレノス M

パン、サテュロス、セイレノスはアルカディアの田園山野の牧神、粗野で悪戯好で好色な、然し愛すべき存在である。**パン**はヘルメスとニュムファ(一説ペネロペ)の子。全身に毛あり山羊の耳と脚を持つ。ヘルメスが神々の許に連れて行くと殊にディオニュソスの気に入って、以来そのお伴となった。水精スュリンクスがパンから逃れきれずに葦(スュリンクス)となったのを切ってパンは葦(スュリンクス)笛を作った。真昼の午後の静けさに突如出現して畜群を驚かす(恐慌(パニック)の語源)。アテナイ人はマラトンの戦でパンが味方したと信じてアクロポリスの北麓の洞に祀っている。最初は一人だったが、後に複数となり、童形(パニスケ)のも生じた。

I カンタロス持つセイレノス Ⅵ

H 葦笛もつサテュロス Ⅲ

J マイナスとセイレノス V

K 縛られたマルスュアス Ⅲ

サテュロスとセイレノスの区別ははっきりしない。馬の耳、尾、蹄をもつ剽軽者である。**セイレノス**は老いたサテュロスとも考えられ、サテュロイの合唱隊の父また先導となる。ニュムファイやマイナデスと共にディオニュソスのお伴をするが、セイレノスはディオニュソスの養育者でもあり、ヘファイストスのオリュムポス帰還にはディオニュソスと共に先導に立つ。太鼓腹、団子鼻、禿頭のセイレノスは屢〻喜劇の好題目となる。哲人ソクラテスの容貌はセイレノスめいていたといわれる。**マルスュアス**はサテュロスともセイレノスとも両説あるがこの族の中で固有の名をもつ稀な例。女神アテナの捨てた笛を拾い、吹奏に習熟して思い上りアポロンに競技を挑んだ。敗者は勝者の意の儘になる条件であったが、もとより音楽神(ムゥサゲートス)にかなう筈なく、敗れたマルスュアスは木に縛られて生皮を剝がれる。

プロメテウス・エピメテウス・パンドラ

A パンドラの出現 V

ゼウス，ヘルメス，エピメテウス，パンドラ，エロス

C パンドラの創造 V

アテナ，アネシドラ(パンドラ)，ヘファイストス

B プロメテウスの人間創造 R

プロメテウスは力によらず知恵によってゼウスに反抗した唯一のティタンである。始めて粘土で人間を造ったともいう(**B**)。人間を快からず思ったゼウスが人間から火を取上げた時、プロメテウスは之を盗んで再び人間に与え、更に様々の技術を教えた(手工業者、特に陶工はプロメテウスを守神とする)。ゼウスは彼を罰すべくヘファイストスに命じて最初の女**パンドラ**(凡ゆる贈物)を作らしめ、アテナが息を吹込み神々がこれに美や宝石や狡智まで与え最後にゼウスが諸悪を詰めた匣を持たせて人間界に送り込んだ。

D プロメテウス M

G プロメテウスとアトラス VI

E 槌を振うエピメテウス V

H 天空を荷うアトラス IV

F ファエトン R

エピメテウス(後から考える者)は兄プロメテウス(予め考える者)の忠告を顧みずパンドラを妻とし、匣の蓋を開いた為に諸ゝの悪が世界中に飛出した。ただ希望のみが匣の中に留った。(これが神話の語る所であるが古い美術はエピメテウスの槌に割られた大地からの大地母神パンドラの出現を表わす。**A・E**)

プロメテウスはカウカススの岩に縛がれ、日毎に鷲が来て彼の肝臓を喰う。夜毎に肝臓は再生する。かくて遂にヘスペリデスに向うヘラクレスが鷲を射て救い出すまで、長年月この責苦を受ける。

アトラスは前二者の兄弟、地の西の果、ヘスペリデスの園に近く蒼穹を荷っている。

ファエトンは父ヘリオスの馬車を暴駆してエリダノス(ポー)河に墜死。その死を歎く姉妹は黒楊樹と化し、崇拝者キュクノス(キュクノス)は白鳥と化した。

24 30

テバイの伝説

F アクタイオンとアルテミス V

I ディルケの懲罰 I

G カドモス VI

H 牛に引かれるディルケ It.

J カドモス M

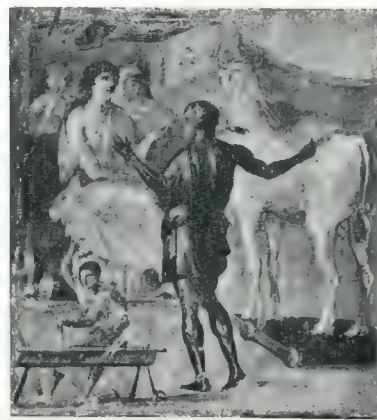
父の命により妹エウロパを探しに出た**カドモス**は神託により一市カドメイアを建てた。後のテバイである。泉の傍でアレスの子の竜を殺し、その歯から生じたスパルトイの五人はテバイ名門の祖となった。八年間の贖罪奉仕の後アレスとアフロディテの娘**ハルモニア**と結婚、その式には凡ての神々が出席、ヘファイストスは運命の首飾を新婦に贈った。その孫にディオニュソスや女神の水浴を垣間見てアルテミスに罰せられる**アクタイオン**がある。テバイ王女アンティオペとゼウスとの双生児**アムフィオン**と**ゼトス**は母を虐遇した大伯母のディルケを牡牛に引かせて復讐する。

9J　10

クレタの伝説

C ダイダロスとイカロス R　パシファエ、ダイダロス、イカロス、アルテミス

A エウロパの誘拐 VI

D ファイドラとヒッポリュトス II

B パシファエとダイダロス I. A.D.

アゲノル王の姫**エウロパ**は牡牛に変身したゼウスによってクレタに掠せられる。その子**ミノス**はクレタ王となったが海神への誓約を破った為に、妃**パシファエ**が牡牛に懸想して牛頭人身のミノタウロスを生むという罰を受ける。王は**ダイダロス**に迷宮（ラビュリントス）を作らせて怪物を閉籠める。ダイダロスは我子と共に翼を作って窓から逃れるがイカロスは太陽に近づき過ぎて海に墜死する。王女**ファイドラ**はテセウスに嫁すが継子ヒッポリュトスへの邪恋はエウリピデスやラシーヌの悲劇で名高い。

43　42

E ミノタウロス VI

B コロノスのオイディプス M

A オイディプスとスフィンクス V

C ポリュネイケスとエリフュレ V

D アムフィアラオスの出発 VI

テバイ王**オイディプス**の悲劇はソフォクレスの昔からコクトオの現代に至るまで数々の劇に仕組れてあまりに名高い。オイディプスの去った後その子エテオクレスと**ポリュネイケス**は王座を争い、後者は追われてアルゴス王アドラストスの許に身を寄せた。王は七人の勇将を語ってテバイに向う。この際**アムフィアラオス**は不吉な将来を予知して従軍を拒んだが、その妻**エリフュレ**にポリュネイケスは例のハルモニアの首飾を贈って夫を説伏せて従軍させることに成功する。途中ネメアで水を求めた彼等を乳母が泉に案内している間に幼い王子**オフェルテス**は大蛇に殺される。アム

E オイディプス It.

H ニオビデスを射るアポロンとアルテミス V

F オフェルテスの死 R

G ニオベの娘 V

I アエドンとイテュス IV

フィアラオスはこれを未来(来るべき殺戮)の前兆であると言った。果してテバイに向った七将はアドラストスを除いて悉く討死した。テバイの不幸はこの後もなお暫く続く。前出アムフィオンの妻**ニオベ**(タンタロスの娘)は七男七女を恵まれ、レトに勝ると誇った為に女神の怒りに触れ、アポロン、アルテミスの兄妹神の外れることなき矢で子女悉くを射殺される(一説では一男一女のみ助ったという)。子等を失ったアムフィオンは自殺し、ニオベは故郷リュディアのシピュロス山麓でゼウスに乞うて自ら石と化し、涙は昼夜石の面を流れている。ゼトスの妻**アエドン**は義兄弟アムフィオン・ニオベの子宝に恵まれているのを羨み、その一人を殺そうとして誤って唯一人の我子イテュスを殺す。アエドンは夜鶯(アエドン)となって今も歎き啼いている(別説あり)。

アッティカその他の伝説

A エリクトニオスの誕生 VI

C ケクロプスと娘パンドロソス V

B アキレウスを抱くケイロン M

D カイネウスとケンタウロイ VII

E ラピタイとケンタウロイの争い V

アッティカ最古の王**ケクロプス**は大地の子で下半身は蛇体だという。アテナとポセイドンがこの地を争った時女神に与した。ヘファイストスがアテナに挑んで拒まれた時大地(ガイア)に落ちた胤より生れた**エリクトニオス**はアテナに育てられ、ケクロプスの娘達(ヘルセ、アグラウロス、パンドロソス。露の姉妹)に預けられ後アッティカの王位を継いだ。

ギリシア神話に屢〻姿を現す半人半馬(古くは人体に馬の下半身がついていた(**D**)のが後には馬体に人の上半身がつく)の**ケンタウロス**はテッサリア、特にペリオン山に結びつく。多くは粗暴な野性を示すが、アスクレピオス、アキレウス、テセウス等を育てた**ケイロン**のような賢者もある。**ラピタイ**族の王ペイリトオスの婚礼に招かれ銘酊して大乱闘を起す話(ケンタウロマキア)は美術の好主題となる。

58, 26　2C　20C　2C

オルフェウス

F オルフェウスの奏楽 V

H オルフェウスの死 V

G オルフェウスとエウリュディケ V

I オルフェウスとエウリュディケ M

オルフェウスはトラキアの河神オイアグロスとムサのカリオペの子。一説にアポロンの子、またヘラクレスに殺されたリノスの裔或は兄弟また弟子などともいわれる。その楽音は木石魚鳥を動かし猛獣をも鎮めた。蛇に咬まれた愛妻**エウリュディケ**の死を傷み冥府に降って歎き歌いハデスの心をも動かして連れ帰る許を得たが、愛と愉悦とに禁を忘れて妻を振返った為に遂に永遠にエウリュディケを喪う。長い悲しみの孤独の生活の後トラキアのマイナデスに引裂かれて死ぬ。秘教オルフィクはこの伶人に由来し、ディオニュソス信仰と類似する。

48C

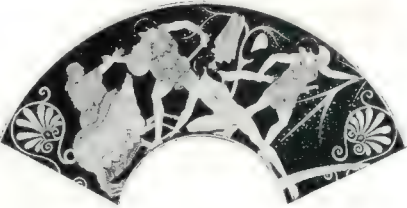
A 海底のテセウス V

B テセウスとアムフィトリテ V

C ポセイドンとアイトラ VI

D アイゲウス我子を認む R

E スケイロン，ケルキュオン，クロミュオンの猪，シニスを討つ V

F ラビュリントス IV

ケクロプスの裔**アイゲウス**は子を得ようとデルフォイに参じた帰途ペロプスの孫**アイトラ**と一夜を契った(同じ夜ポセイドンも彼女と媾った)。ある岩の下に剣と鞋(サンダル)を隠し我子がそれを取出し得た時に寄こすよう云い置いて去った。その子**テセウス**は成長して岩を押しのけ剣と鞋を持ってアテナイに向う。途中木を曲げて人を殺すシニス、大亀に食わせて殺すスケイロン、相撲で殺すケルキュオン、寝台に合せて伸したり切ったりするプロクルステス等を皆彼等の方法で打平げて父の許に至る。

40　64

H アマゾネス女王ヒッポリュタと闘う V

G プロクルステスを討つ V

J ミノタウロス退治 V

I ペイリトオスと少女ヘレナを誘拐 VI

L ディオニュソスとアリアドネ VI

テセウス，アテナ，ディオニュソス，アリアドネ

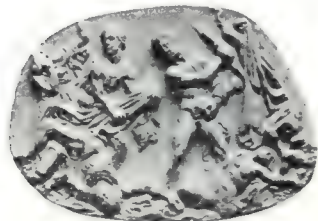
K ナクソス島に眠るアリアドネ V

テセウス，アテナ，アリアドネ，ヒュプノス

件の品によって父に認められたテセウスは、自ら進んでミノタウロスの貢物に加わった(クレタ王ミノスはアテナイを攻め怪物の餌食に少年少女各七人を貢物とし取立てた)。途中王の指輪を求めて海底に潜りアムフィトリテに歓迎された。王女**アリアドネ**の手引きによって糸を戸口に結びこれを手繰りつつ迷宮(ラビュリントス)に入り首尾よくミノタウロスを退治した。少年達とアリアドネを連れて出帆、ナクソス島に立寄った時ディオニュソスがアリアドネに懸想してレムノス島に連去った。かくてアテナイに凱旋したが合図の白帆を忘れ黒帆の儘帰航したので父王は我子が死んだと誤信して海に身を投じた。アテナイ王となったテセウスはアマゾネスと戦って女王**ヒッポリュタ**(或はアンティオペ)を妻としヒッポリュトスを得、後妻フアイドラの悲劇の因を作った。

36

F オレステスの復讐 Ⅵ

F タルテュビオス，クリュタイメストラ，クリュソテミス，オレステス，アイギストス

I オレステスとピュラデス R

G アポロン，オレステスを浄祓す Ⅳ

J オレステスとエレクトラ Ⅴ

H タウリスのイフィゲネイアとオレステス R

トロイア遠征の総大将**アガメムノン**は故郷ミュケナイに帰るや否や妃**クリュタイメストラ**と姦夫**アイギストス**に殺された。王女**エレクトラ**は幼弟**オレステス**をフォキスのストロフィオスに預けた。その子**ピュラデス**と共に成長したオレステスはデルフォイに伺を立てた後父の仇を遂げた。が復讐女神（エリニュエス）に追われて狂気に襲われデルフォイでアポロンの浄祓を受けたが、尚病を癒す為に神託に従って遥々タウリスの地にアルテミス神像を求めて赴いた。異国人を殺す習慣をもつ国人に捕えられたが、アルテミスの祭司となっていた姉**イフィゲネイア**に邂逅し、共々に帰国した。盟友ピュラデスとエレクトラを結婚させ、自分はヘルミオネ（一説エリゴネ）を娶って一子ティサメノスを得たが、アルカディアで蛇に咬まれて死んだ。

54　30　56

B ベレロフォンのキマイラ退治 Ⅳ

A 冥府のシスュフォス Ⅵ

D レトに挑むティテュオス Ⅵ

C フリュギア服のアマゾン Ⅴ

E ポリュイドスとグラウコス Ⅴ

コリントス市の建設者**シスュフォス**はゼウスがアイギナを奪ったのを父アソポスに密告した廉で、押上げるとは転り落ちる岩を永遠に押上げる責苦を課せられている。その孫**ベレロフォン**はペガソスに騎してキマイラを退治した。巨人**ティテュオス**はゼウスの隠し子で、レトに挑んでアポロンに殺された。尚武の女人族**アマゾネス**は小アジアのテルモドン河畔に棲むという。ミノスの子グラウコスは幼時、蜜の甕に落ちて死んだのを、予見者ポリュイドスに見出され蛇の用いた薬草で蘇った。

31　8　43, 49, 57

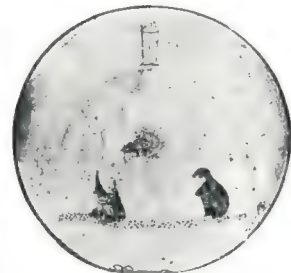
ペルセウス

A ダナエと黄金の雨 V

C ペルセウス H

B ダナエとペルセウスの箱 V

D ペルセウス R

アクリシオスは孫に殺されるであろうとのお告を得て娘**ダナエ**を青銅の室に閉籠めたが、ゼウスが黄金の雨となって忍び入り**ペルセウス**が生れた。アクリシオスは母子を箱に入れて海に流した。箱はセリフォスに漂着してペルセウスは王弟ディクテュスに育てられた。王ポリュデクテスはダナエに恋したがペルセウスを邪魔にして**メドゥサ**の首を取って来ることを命じた。ゴルゴネス三姉妹は黄金の翼、青銅の手、蛇の髪を持ち、それを見る者を石と化す怖しい怪物であるが、末のメドゥサだけは不死でなかった。ペルセウスは先ず、三人で一眼一歯を

E メドゥサ退治 V

G アンドロメダを救う R

F ヘスペリデスの園でのメドゥサ退治 Ⅳ

共有するグライアイを尋ねてメドゥサ退治に必要な品をもつニュムファイの居る所を教わった。翼ある鞋(サンダル)、隠れ帽、袋(キビシス)である。これを手に入れるとヘルメスから金剛の鎌を得てアテナに導かれてゴルゴンに近づき直接その面を見ず楯に写して首尾よくメドゥサの首を切り(その際メドゥサの血からポセイドンの胤のペガソスとクリュサオルが生れた)キビシスに収めて逃げた。姉妹は後を追ったが隠れ帽のお蔭で遁れた。帰途アイティオピアで王女**アンドロメダ**が海の怪獣に人身供養になるのを救い、伴ってセリフォスに帰り暴虐のポリュデクテスを化石せしめ、母、妻と共に故郷アルゴスに帰ったが、運命の予言の如く円盤投で誤って祖父を殺してしまった。メドゥサの首はアテナに捧げた。メドゥサ以来女神はそれをアイギスの中央につけている。

B レルナのヒュドラ退治 V

A 蛇を掴み殺すヘラクレス I. A.D.

C リノスの許に赴くヘラクレス V

リノス，イフィクレス，ヘラクレス，ゲロプソ

D エリュマントスの猪と壷中のエウリュステウス王 V

アムフィトリュオンの妻アルクメネにゼウスが生ませたヘ**ラクレス**は剛勇無双しかも知謀に長けたギリシア第一の半神、もとアルゴスの出だが全ギリシアの国民的英雄である。生後八月早くもヘラが送った二匹の蛇を掴み殺して両親を驚かす。戦車、相撲、弓術、刀槍の修業怠りなく、音楽の師**リノス**に窘められたのにかっとなり竪琴で打殺して了う。十八歳キタイロンの獅子を殺しその皮を身にまとい頭を兜とし、アテナに長衣、ヘファイストスに胸当、ヘルメスに剣を賜り、棍棒は自ら作った。

E ヘラクレス V

I キュクノスと闘う VI

F クレタの牡牛を生捕る VI

J ヘスペリデスの園で R

G アマゾネスと闘う VI

H ゲリュオネス退治 VI

ヘラの嫉妬によって狂気し我子を火中に投じたりしたが、デルフォイの神託に従って**エウリュステウス**王に十二年間奉仕して所謂十二難業に従う。1ネメアの獅子退治、2レルナの水蛇退治、3ケリュネイアの鹿(金角銅脚の聖獣)生捕、4エリュマントスの猪生捕、5ステュムファロス沼の鳥退治、6エリス王アウゲイアスの厩掃除、7クレタの牡牛生捕、8ディオメデスの牝馬生捕、9アマゾネス女王ヒッポリュタの帯奪取、10ゲリュオネスの畜牛生捕、11ヘスペリデスの園の黄金の林檎獲得、12冥府から三頭竜尾のケルベロスを連行する。(異説あり)これら困難を極めた難業をヘラクレスは甥の**イオラオス**の助力と、何よりも守護女神アテナの加護によって成し遂げた。この間アレスの子キュクノス、大地の子アンタイオス等とも闘って勝った。

18*f.*　43H

A アケロオスと闘う Ⅵ

D ネソスよりデイアネイラを取戻す Ⅴ

B アンタイオスと闘う Ⅵ

C アポロンと三脚を争う Ⅵ

E ヘラクレスとイオレ R

更にカウカススでプロメテウスを解放し冥府でテセウスを助けたりして十二難業を完遂した後オイカリア王オイネウスの娘**イオレ**に求婚して得ず(後王を討ち王女を捕虜にす)親切な王子イフィトスを殺して病み、デルフォイに来たが神託が与えられないので神殿を荒し三脚(トリプス)を奪おうとしてアポロンと争った。この瀆神の償にリュディアの女王**オムファレ**の奴隷に売られた(この主従の恋愛や服装の交換はヘレニスム以後の趣向である)。ヘラクレスはアルゴナウタイの遠征にもカリュドンの猪狩にも参加した。イリオン(トロイア)を攻略しアルカディアやヲケダイモンを悪王の手から解放しエリスではオリュムピア競技を設けた。さらに神々と巨神(ギガンテス)との戦に加わって神々に勝利を齎した(死すべき者の参加なくしては神々の勝利はなかったのである)。

35　8　53 52　1

F ヘラクレスとアテナ Ⅴ

H ヘラクレスの身装する女王オムファレ R

G オリュムポスに迎えられる Ⅴ

I 我子テレフォスを見出す I. A. D.

J アドメトスにアルケスティスを連戻す M

ヘラクレスはテゲアでアテナの女祭司アウゲと媾って一子**テレフォス**を遺した後カリュドンに来てメレアグロスの妹**デイアネイラ**に求婚し河神アケロオスに打勝って彼女を得、共にエウエノス河を渡るとき渡守ネソスが彼女を犯そうとしたので之を射殺した。ネソスは己の毒血を媚薬になると偽った。後にイオレを捕えた時デイアネイラは愛の移るのを怖れて夫の衣にその血を塗った。その毒の苦しさに自らオイテ山で死せんとした時ヘラクレスは不死を得、オリュムポスに迎えられてヘラと和解しその娘**ヘベ**を娶った。

53

D メデイアに殺されるクレオン王と王女グラウケ Ⅳ

A 犠牲を捧げるアルゴナウタイ Ⅴ

B イアソンとアテナ Ⅴ

E メデイアとその子等 I.A.D.

C アテナとアルゴナウタイ Ⅴ

ボイオティア王子**フリクソス**を後妻イノが策略で牲にしようとした時、生母雲(ネフェレ)はヘルメスから授った金毛の羊に**フリクソス**と妹**ヘレ**を乗せて遁がした。ヘレはヘレスポントス(ヘレの海)で墜死したが兄はコルキスのアイエテス王の許に着いた。羊はゼウスに捧げられ皮はアレスの森に置かれた。イオルコス王の裔**イアソン**を中心に殆ど全ギリシアの半神がアルゴ号に乗船して遥々この金毛羊皮を取りに行くのがアルゴナウタイの物語である。**イアソン**に嫁して怖しい魔術を使う王女**メデイア**の話は古今の文学美術に描かれる。

F 金毛羊に乗るヘレ

G アドメトスとアルケスティス I.A.D.
左からアドメトス、アルケスティス、アポロン、アルテミス、両親

H メレアグロスとアタランテ I.A.D.

I メレアグロス Ⅳ

J カリュドンの猪狩 Ⅵ

フェライの王**アドメトス**もクレテウスの後でイアソンの従弟に当る。キュクロプスを殺した償にアポロンは牧者としてこの王に仕え畜群を富まし久恋の美女**アルケスティス**を妃とすべく力を藉した。アドメトスの死すべき時アルケスティスは身代りとなって夫の命を永らえさせた。それをヘラクレスがハデスより奪って夫の許に連れ戻してやった。**カリュドン**王オイネウスは初穂の式にアルテミスを忘れた為に女神は巨大な猪を送って人畜を荒した。この猪退治に全ギリシアの勇者が集った。唯一人女丈夫**アタランテ**の加わるのを他の男達は反対したが王子**メレアグロス**は共に出猟せしめ剰え第一の矢を猪に射当てた女丈夫に賞としてその皮を与えたので母の同胞と争を生じ、彼等を殺した為に母に恨まれて不死なるべき命をあたら失うことになった。

レダ・ヘレナ・ディオスクロイ

A レダと白鳥 III

B レダと卵とディオスクロイ V

D テュンダレオスとレダ V

E カストルとポリュデウケス V

C ヘレナの誕生 IV

ラケダイモン(スパルタ)王テュンダレオスの妃**レダ**に懸想したゼウスは白鳥に化して王妃と媾った。レダは二つの卵を生み、その一つから**ヘレナ**他から双生児の**カストル**と**ポリュデウケス**が生れた。一説ではヘレナとポリュデウケスのみゼウスの子で、カストルとクリュタイメストラは夫王の子だというが、兄弟を指す**ディオスクロイ**はゼウスの息子らの意である。カストルは御馬、ポリュデウケスは拳闘の名手、共に白馬を駆って常に同行する。テセウスに掠奪されたヘレナを取戻し、従兄弟リュンケウス、イダスの結婚式にその花嫁(レウキッポスの二女)を奪って妻とした。

43 I 45

F レダと白鳥 M

パリスの審判

H パリスとオイノネ M

G レウキッポスの娘達を奪うディオスクロイ V

I パリスの審判 V

上列
ゼウス，エリス，
エウテュキア，ヘリオス
下列　クリュメネ，ヘラ，アテナ，アレクサンドロス(パリス)，ヘルメス，アフロディテ，エロス

トロイアの王子**パリス**(アレクサンドロス)は母の夢見でイダ山に捨てられ牧者に育てられる。ペレウスとテティスの結婚式にエリスの投込んだ「最美の神に」と記された黄金の林檎をヘラ、アテナ、アフロディテの三女神が争い、その審判がパリスに委ねられた。ヘルメスの先導でイダ山に訪れた三女神は報賞として夫々権力、戦勝、最美の女性を約束した。パリスは最後の贈物を選んでアフロディテに林檎を渡した。女神の斡旋によって世界最美の女性、今はスパルタ王メネラオスの妃で既に子女もあるヘレナは遂にパリスと共にトロイアに赴く。この美女を奪還すべく全ギリシアの勇将がトロイアに遠征しあの大戦争となるのである。パリスはフィロクテテスの矢に致命傷を受け、妻**オイノネ**にも(ヘレナの故に)治療を拒まれて死に、妻も自殺する。

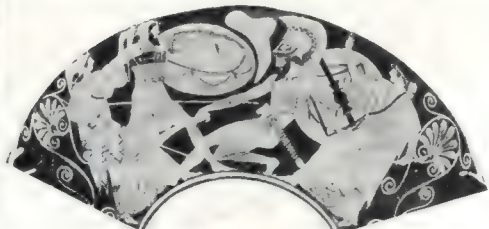
58 60

D イフィゲネイアの犠牲 I. A. D.

A ヘレナの誘拐 V

アイネイアス, パリス, ヘレナ, アフロディテ, ペイト

B トロイロスを待伏せるアキレウス VI

E メネラオスとパトロクロス III

C アイアスとヘクトルの一騎打 V

F 足の傷を冷すフィロクテテス H

ヘレナの求婚者達の間には誰にしろヘレナの夫の危急には皆が支援する盟約があった。かくて長い準備の後五十に近い将に率いられた千余隻の船はトロイア指して出航する。無風の為にアウリスで立往生し**イフィゲネイア**を犠牲にしたり(アルテミスは彼女をタウリスに移す)蛇に咬まれて悪臭を放つ**フィロクテテス**をレムノス島に置去りにしたりして漸くにしてトロイアに達しここに十年の攻防は始まる。

H メネラオスとヘレナの邂逅 V

3人目よりアフロディテ，ヘレナ
メネラオス，プリアモス

G テルシテスの死 IV

J メムノンの屍を抱く母エオス V

K パトロクロスを介抱するアキレウス VI

I アキレウスとペンテシレイア V

先ず最初に上陸したプロテシラオスは運命の定めによってヘクトルに討たれて死ぬ。続いて**アキレウス**がミュルミドンの将兵を率いて上陸し、プリアモスの末子**トロイロス**を討取った後トロイア周辺の百の町を攻略する。しかし攻防は一進一退、勝敗は決することなく九年の歳月が流れる。トロイア軍には続々と援軍が到着する一方、アカイア(ギリシア)方は女囚の事から**アガメムノン**の横暴を怒って勇将アキレウスは戦陣を退いて閉じ籠ってしまう。**アイアス**と**ヘクトル**、**メネラオス**と**パリス**の一騎打も勝負なく終りギリシア軍の形勢は次第に不利となって行く。見るに見かねた**パトロクロス**はアキレウスの武具を身につけ獅子奮迅よく頽勢を挽回したがアポロンの加護あるヘクトルの槍に斃れ、ここにアキレウスは友の復讐に立上る。

トロイア戦役・アキレウス

A テティスとペレウス Ⅵ

C オデュセウスに見破られる I. A.D.

B ケイロンの教育 I. A.D.

D アマゾネスと闘う R

E ステュクスに浸される M

トロイア戦役第一の花形、イリアスの主人公は白銀の足もつテティスの子**アキレウス**である。ゼウスもポセイドンもテティスを望んだがその子は父に勝るといわれたので手を引いた。**ペレウス**は様々に姿を変える女神をしっかりと捕えて放さず、盛大な婚礼に神神を招いた。テティスは我子を不死にすべくステュクスに浸したが掴んだ踝の所だけ不死にならなかった。即ちアキレス腱である。アキレウスはケンタウロスの**ケイロン**に育てられる。トロイアで死すべき運命を予知した母はアキレウスを少女に仕立てリュコメデス王に預けたが(ここで王女**テイダメイア**との間にネオプトレモスが生れる)オデュセウスの詭計に見破られ、かくてトロイア遠征に加わる。愛する友パトロクロスの死に悲泣慟哭したアキレウスは死を覚悟して出陣する。母がヘファイストスに依頼した新しい武具を装い霊馬クサントスの引く戦車に打乗り雄詰(おたけび)鋭くトロイア軍を蹴散し遂に**ヘクトル**を討取って友の仇を返す。その屍を戦車に結んで引ずり廻したアキレウスも老父**プリアモス**の乞にヘクトルの屍を返し葬送の間干戈を休めた。その後もアキレウスはアマゾネスの女王**ペンテシレイア**を殪し(刺した後女王の美と勇気とに恋著し、それを嘲ったテルシテスをも殺す)、曙(エオス)の子**メムノン**をも討果すが、アポロンの加護あるパリスの矢に致命の踝を射られ、母やネレイデスの歎きの裡に無比の勇士も遂に不帰の客となる。

13,21　55　40　21J,13E　57I　57J

H ヘクトルの武装 Ⅵ

プリアモス，ヘクトル，母ヘカベ

I ヘクトルとの一騎打 V

J プリアモス，我子の屍を乞う V

F アイアスと将棋を指す Ⅵ

G メムノンと闘う Ⅵ

A アキレウスの武具を争うアイアスとオデュセウス V

C パラディオンを盗むオデュセウスとディオメデス R

B ネオプトレモスに武具を渡すオデュセウス V

D 小アイアスとカッサンドラ R

アキレウス遺愛の武具を大アイアスとオデュセウスが争い、アテナとアガメムノンは後者に加勢した。為に**アイアス**は乱心しやがて正気に返ると恥じて自裁する。トロイアを落すにはヘラクレスの矢とアキレウスの子を要し、更に城中にあるパラディオンを奪取せねばならぬというので、件の矢を持つ**フィロクテテス**がレムノス島から呼び寄せられ、その矢によってパリスは死ぬ。馳せ参じた遺子**ネオプトレモス**にオデュセウスは亡父の武具を悉く譲り渡す。更にオデュセウスはディオメデスと城内に忍び込み、ヘレナの手引きで首尾よくパラディオンを盗み出した。最後にギリシア軍は木馬の計を用いてイリオン城内潜入に成功する。木馬の引入れに反対した**ラオコオン**は二子諸共二匹の大蛇に殺され、王女**カッサンドラ**の予言も人の耳には入らなかった。

55 56 6

E 大アイアスの自殺 M

G トロイア落城 V

F メネラオスとパリスの一騎打 V

H プリアモスに迫るネオプトレモス V

アカマス，ポリュクセナ，プリアモス，ネオプトレモス，アステュアナクス

I 父アンキセスを背負うアイネイアス M

夜に入って木馬から跳り出したアカイア勢は家々を掠奪し殺戮を肆にした。メネラオスはヘレナを連戻し、ネオプトレモスはゼウスの祭壇に憐を乞う老プリアモスを討ち、ヘクトルの幼児アステュアナクスも塔より投落された。**小アイアス**はアテナ像に縋るカッサンドラを犯し(後神罰を受ける)、王女ポリュクセナはアキレウスの墓上で殺された。**アイネイアス**の老父**アンキセス**を背負うて遁れるのをギリシア軍も黙許した。かくてトロイアは滅び、ギリシアの将たちは夫々の戦利品を携えて様々の運命のまつ家路をさして難儀に満ちた帰途に就く。

10 57H

A オデュセウス V

B ポリュフェモスの眼をつぶす VI

C ポリュフェモスの窟から脱出 VI

D けものにされたオデュセウスの仲間とキルケ VI

ギリシア将兵の帰還(ノストイ)の中でも特に波瀾に富んだイタカの王**オデュセウス**のそれはオデュセイアに委曲を尽して語られる。智謀に長けたこのアテナの寵児も一眼巨人(キュクロープス)ポリュフェモスの眼をつぶしたばかりにその父ポセイドンの憎みを受け長の年月海上を漂流せねばならなかった。魔女**キルケ**の島では仲間を獣に変えられたり、母アンティクレイアや僚友エルペノルの霊と語った。

E キルケをおどすオデュセウス M

H 王女ナウシカに逢う V

F エルペノルの霊を見る V

I エウリュクレイア，主人を認める V

G セイレネスの歌 V

J ペネロペの求婚者を射る V

その唄で舟人の心を魅し船を沈めるという人面鳥身の**セイレネス**の唄もオデュセウスのみは檣に身を縛して聞き(同僚は耳を蠟で塞いで聞えぬようにした)、スキュラやカリュブディスの怪をも危く逃れ、美しい水精(ニュムフ)**カリュプソ**の許に七年を過し、最後にファイアケスの王女**ナウシカ**に救われて漸く故郷に辿りついたが、そこには三年来多数の求婚者が**ペネロペ**に再婚を迫って我物顔に振舞っていた。先ず息子**テレマコス**に身を明し忠実な乳母エウリュクレイアや豚飼エウマイオスと策略を練り、無双の大弓で求婚者を悉く射、妻や老父と再会を喜んだ。

K オデュセウスとペネロペ It.

索　　引

ペロプス

A　ペロプスとヒッポダメイア　V

B　アテナイの梟　V

タンタロスの息**ペロプス**は父に殺され神々の食饌に供せられたが美少年となって蘇った。ピサの王オイノマオスは娘**ヒッポダメイア**の求婚者に馬車競争をして勝ったら娘をやるが負ければ殺すと云って既に十三人の命を奪った。ペロプスはポセイドンに賜った駿馬で父アレスの馬を御すオイノマオスを破って王女を得、自分の名に因むペロポネソスを領した。

ギリシア神話の世界

ギガントマキア Ⅱ クリュティオス，ヘカテ，オトス

¥ 100